

前川先生の思い出

奥原弘人

前川文夫先生が去る1月13日逝去なさいました。いただいた年賀状に入院中とはありましたが、それほどは存ぜず少からず驚きました。

考えてみるに私が前川先生にお世話になるようになった切っ掛けは今では岐阜県指定の天然記念物になっているモミランを見つけたことです。1954年岐阜県坂下町でこれを見つけたがマツランと違うこの着生蘭について手元にあった文献では知ることが出来なかったので前からお世話になっていた国立科学博物館の奥山春季先生にお願いして、これが高知県で発見されたモミランという珍種であること、栽培して花を見たいので生品を送るようにとのご返事を頂き翌年東大植物園で愛育中、とのお便りがありました。1956年前から調べていた木曽谷の着生蘭についてモミランも含めて植物研究雑誌に発表させていただきました。当時前川先生は園長をなさっておられて、これらをご覧になったようで1958年2月お便りを頂きました。

これは長文ですので要点を記しますと、日本着生蘭の原色図譜を作る仕事をやっているが…難物が残って弱っているので御援助頂きたい…奥山氏にお送りのモミランは私が頂いて栽培…紅葉期の着色画を作りました…花を是非入手したい…御援助願えませんか…鈴木吉五郎氏は…貴地に参上して頂いてきたいと…御多忙と思いますし御苦心で御発見のものですからその点は充分心得…お助け下さることを心からお願い…幸におきき届け頂けますならば…鈴木氏が伺い…突然ですが学問のために御助力を切に願います…昨春から病臥中、と素人の私に對しまことにご丁寧な文面でありました。

そこで鈴木さんと連絡のうえ3月27日国鉄坂下駅で合流し現地に案内して所有者の許可を得たうえで着生しているカヤの大木によじ登って丁度花盛りのものを適当量採って下に待っておられる鈴木さんに渡しました。これによって描かれたものが名著「原色日本のラン」に載せられて次のような説明がなされています。中央のものは木曽谷で奥山春季氏の入手されたもの…33年3月27日鈴木吉五郎氏が木曽で採集したものを描いたのは下の二つの花のある株…、(木曽となっているのは私の報文が木曽谷のとなっているのと木曽にもあるからであろう)

鈴木さんにお目にかかった時スミレの同定のむず

かしいことなど申し上げたところ前川先生もスミレを研究しておられること、自分も栽培しているので珍種があったら頂きたいとお便りもありました。このことがあって1ヶ月余の5月初御岳の麓で見たことのないスミレの1群を見つけたので鈴木さんのお話を思い出し前川先生に標本を送って同定をお願いしたところ直ちに次のようなご回答を頂きました。「これは雑種とします。恐らくスミレ×ホソバスミレでしょう。今まで名がないようですから *Viola × Okuharae* F. Maek. n. hybrid. オクハラスミレ (n. n.) としたいとします。そこでこの親を確かめようと翌春現地を調べて附近にはアケボノスミレ、サクラスミレ・マキノスミレの3種があってスミレは見られなかったの、これはサクラスミレとマキノスミレとの雑種と思われるとして生品をお届けしたところ、「御説のようにサクラスミレとマキノスミレとの雑種らしく思われます。見事に両者のよい点だけが拾われていると思われ傑作です」とまたまたごいねいなご回答を頂きました。

その頃私は前に木曽で発見されたというシナノスミレ・キソスミレそれにオンタケブシの再発見に努めていたので東大の標本を拝見したいとお願いしてお許しを頂き上京しました。これが前川先生にお目にかかった最初でした。標本室からこれらを選び出して見せて下さいましたが、先生から標本の取扱いについて細かなご注意があって標本を大切にされる先生の態度、学問に対する厳しさというようなものを感得することができました。

先生はカンアオイについても若い頃から研究されておられたことはご著書でも分かります。木曽には久内先生によって発見されたキソジノカンアオイがあるが木曽谷最北の開田村で見たのには少し違うような形のものもあったので、それをご覧いただいて同じ村でありながら東の末川のものにはキソジであり西の西野と北隣の奈川村のものはミヤマアオイであると教えていただき、また最近下伊那南部で採ったのはコバノカンアオイであると教えていただきました。

信州には特産のミドリオタフクギボウシがありミズギボウシの分布も問題になっていたところ、ある年ギボウシについて先生のご講演があるとき上京しました。先生はギボウシについても若い頃から関心をもっておられたとかで重要な分類点についての

お話を拝聴することが出来ました。その他についても教えて頂きましたが今は再び何事もお願ひすることが出来なくなりました。

先生には日本の植物区系・日本の固有植物・植物の名前の話などのご著書もあってご研究の一端は伺われますが退官されてからも進化生物学研究所の主任研究員として研究を続けられたので学界にとっても大きな損失と思います。

先生は1968年には東亜関連植物調査団の団長として南米に渡られたことありますが1973年には奥様をなくされ、ご自身も長男忠之さんのお話によれば三度も死線を越えてこられたとか、お目にかかったある時も急にお腹をおさえて苦しめたこともありました。そのためか健康には常に注意しておられたようで水島先生が逝去された時も告別式が終って

の帰りに出口でぱったりお目にかかり駅までお供しましたが話題は健康問題であったと記憶しています。本会の第10回記念総会で先生にご講演をお願いした時も、お目にかかるなり「健康で何よりですねえ」とお言葉を頂きました。この寒い時に寒い信州に泊りがけでおいで願うことを心配していたところ却ってこのようなお言葉で恐縮しました。

頂いた年賀状には執筆と監修にあたられ去る2月出版された「日本の野生植物」の出版を待たれるお気持ちが表されていますが、それをご覧になることもなく逝去されたことはさぞ残念であったことでありましょう。

三度も死線を越えられた先生も今回はついにそれが出来ず本当にお気の毒でした。謹んでご冥福をお祈り致します。

〔新刊紹介〕和田清著「緑の森ブナ林を求めて」信濃教育会出版部発行、A5判、219頁（1983）、1200円。

信州植物生態研究グループの一員である著者は、長野県の植生を長年にわたって調査、研究されてきた。また、最近その成果をもって植物社会学の第一人者のチュクセン教授（ドイツ）のもとで研究されてきた。本書はこれら長年の蓄積と足跡を小学校高学年以上の人たち向けに、わかりやすくあらわしたものである。ブナ林を求めてとは、著者の専門が夏緑広葉樹林であり、そのほんものブナ林について研究をすすめられてきたからである。

しかし内容は信州全体の植生についてやさしく解説されている。目次を拾うと、1 森や林、2 植生図をつくる、3 すぐれた信州の植生、4 人の力と植生、5 ブナ林を求めて、6 ふるさとを緑に、7 ヨーロッパのブナ林、となっている。植物社会学はわが国ではまだ比較的新しい分野であり、一般の人びともわかりにくい面がある。また、それを伝えることも難しい。本書は自然にその中へはいって行け、また素直に理解できる内容となっている。これは著者のすぐれた目と知識、文才によるものであろう。

植物的自然=みどりは、最近マスコミなど多くの人たちにその重要性や保護がさげばれている。しかしどれほどの人びとがみどりに接し、みどりの姿を知っているか疑問である。著者のみどり（自然）を愛するところが随所ににじみでている本書は、知らず知らずのうちに共感をもってひきこまれ、みどりの大切さも知るようになる。とくに全国の教育畑の人びとの活用を期待したい。（K.T.）

〔新刊紹介〕波田町誌編纂委員会（編）「波田町誌・自然民俗編」B5判、703頁。1983年3月、波田町発行。

ここ20年来の社会情勢の著しい変化は自然環境もそこに生きる人々の生活風習もかつてとはまったく違ったものにしようとしている。このような時にあって、その地域の過去と現在の姿を記録する事業はこれまで歩んできた道を評価し、将来を展望するために意義深いことである。亜高山針葉樹林におおわれた鉢盛山を中心とする山地から耕地の多い梓川扇状地の平坦部まで東西に延る波田町の自然は変化に富み、地域住民の生活との関係も深い。本誌自然編の第1章は長野県の地質地形の概観にはじまり、波田町全域の地質地形とその成立過程が解説されている。第2章では波田町の気象の特徴が資料や観測結果に基づき明らかにされるとともに、町内各地域の気象の比較や気象と農作業、災害についても述べられている。第3章では哺乳類、鳥類、昆虫類が主に扱われているが、鱗翅目昆虫については特に詳細である。人の目につきやすい哺乳類についてはその分布や近年の消長についてもう少し具体的にふれてもいいのではなかろうか。第4章は植物に当てられている。十数年に及ぶ植生調査の蓄積があり、1182種の植物が記録されている。このなかには分布の限界であったり稀産の種が少なからず含まれ、31種が注目すべき植物とされている。年中行事や遊びに取り入れられた植物についても記され興味深い。第2編民俗編にはムラの社会組織、衣食住から芸能伝承に及ぶ12章が収められている。（K.S.）